編集後記・Editorials

魚類学雑誌 57(1): 92
2010年4月26日発行

魚類学雑誌の主任編集委員が交代いたしました．佐々木邦夫氏にかわり，今号から主任編集委員を務めている古屋と申します．よろしくお願いいたします．和文誌の主任としては5代目にあたります．前任の佐々木邦夫氏には52巻2号から56巻2号までの6年間，9冊の編集にたずさわっていただきました．長い間のお務めご苦労様でした．私の得意とする分野は生殖生理学ですが，本誌では専門性を生かせることはあまり期待できないようです．今号についても記事の大半は私の専門外であり，原稿を読む日々は毎日が修行です．とはいえ，本誌にはこれまでに私自身の投稿では大変お世話になっています．これからはその恩返しのつもりで，掲載記事のますますの充実と編集ミスの撲滅をめざして修行に励んで参りたいと思います．皆様からのたくさんの投稿をお待ちしております．

魚類学雑誌57巻1号には原著論文9本のほか，会員通信に3本の記事が寄せられています．全体的みると希少魚や移入魚に関係した論文・記事が8本と目を引きます．本号の希少魚シリーズでは国内外来魚問題に焦点をあてていますので，「希少魚，外来魚特集号」の様相を呈しています．過去の魚類学雑誌を振り返っても，希少魚や移入魚に関する論文・記事はせいぜい年平均2，3本程度であったのが，56巻あたりから7本と増えていますので，近年いかにこれらの問題が我々魚類の研究者にとって主要な研究課題になってきているのかが伺われます．生理学が専門の私においてさえも，魚を研究材料にしているというだけで，地元自治体の絶滅危惧種のリストづくりに追われているほどです．今年の10月には名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が開催されるとのこと．生物多様性の保全にこれまで日本魚類学会の果たしてきた役割には大きなものがあります．今回のCOP10開催にあわせて日本魚類学会でも名古屋市で市民公開講座を開催するようです（「お知らせ」を参照）．この機会に広く一般市民の方々にも生物多様性保全に関する現状や問題点について関心を持っていただけるよう，学会の活躍に期待しましょう．将来，「希少魚の保全」や「移入による撹乱」などの記事が魚類学雑誌から見られなくなる日が来ることを夢見たいものです．

（古屋康則）